

令和3年（2021）

■ 6月22日（火）

真福寺貝塚6年目の調査が始まりました。

昨年の調査に引き続き、史跡指定地の西側にある窪地から泥炭層遺跡にかけて、調査を行います。昨年調査した2つの調査区の西端部分の調査を引き続き行います。厚く堆積した埋積土をさらに掘り下げていきます。

調査は、縄文時代後期から晩期にかけて、綿々と積み重なっている縄文人の活動の痕跡を細大漏らさずとらえながら、縄文真福寺ムラのなりたちを解き明かすことを目指しています。史跡の保存と両立させながら発掘を行うために、トレンチという、溝状の調査区の中で調査を行います。

北側の調査区（第1区）は、昨年度まで調査してきた第2トレンチの西端部分です。南側の調査区（第2区）は、昨年度まで調査してきた第1トレンチの西端部分です。調査で使う道具やプレハブ、調査協力員のみなさんが使うトイレなどは、前日までに搬入・設営済み。調査初日の今日は、発掘調査歴戦の勇士の調査協力員の皆さんが集合し、調査方針のミーティングを行ったあと、早速作業にとりかかりました。昨年の調査のあと、遺跡の保護のために埋め戻した土を取り除く作業を行いました。

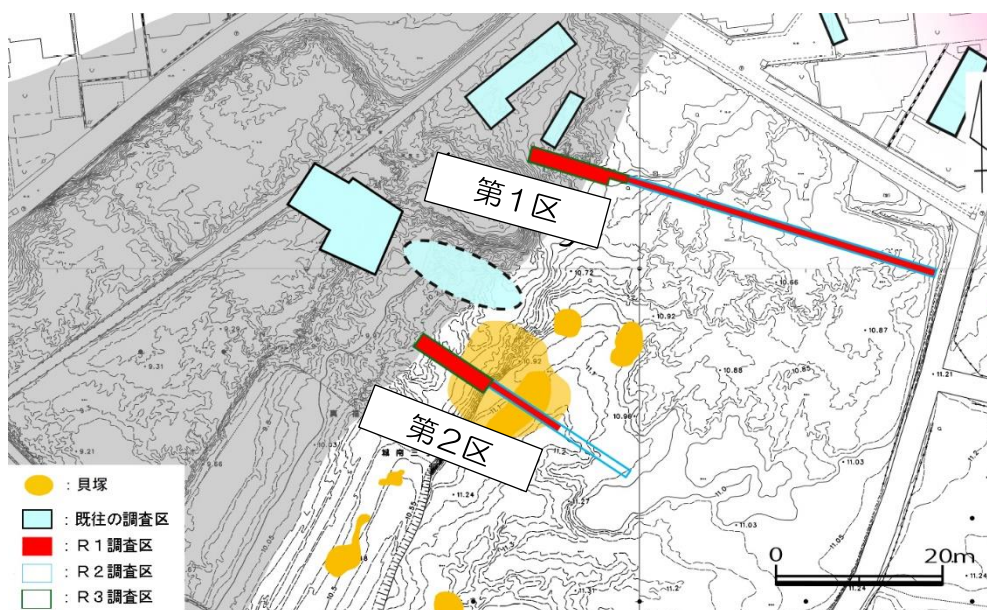


図1 調査区の位置

令和3年（2021）

■ 6月24日（木）

谷部（泥炭層遺跡）に向って強く傾斜する調査区内では、調査面保護のために設置していた土のうを取り外すとすぐさま水が湧き始めました。

南側の2区では、西端部分の一番低い所に水を集めて（写真1）、その周囲の水が引いたところから掘削を開始しました。掘り始めるとすぐに、縄文時代後期後葉の土器片が姿を現し始めました（写真2）。



写真1 調査のはじめは水の処理



写真2 2区西端部で姿を現し始めた後期後葉の土器

北側の1区では、2区よりもさらに西側（谷部側）に水が溜まっていた（写真3）。写真中央に堆積する黄褐色土は一見、関東ローム層に見えますが、土器や炭化物、焼けた骨片を含む遺物包含層です。

令和3年（2021）



写真3 1区の状況

黄褐色土層の下には大形の土器片と炭化物を多く含む、暗褐色土層が堆積しています（写真4）。大形の土器破片はいずれも西側（谷部）へ向かって傾斜して堆積していました。



写真4 黄褐色土層の下の暗褐色土層中の遺物群

令和3年（2021）



写真5 縄文時代晩期前葉を主体とする土器群

この層から出土する土器は、晩期前葉の土器を主体としています（写真5）。外側が上を向いて出土した土器には、細い線で区画した間に細かい目の縄文を丁寧につけたり、丁寧に磨いたりして、その下側は縦方向の線の模様をざっくりつけて・・・この時期の土器の典型的な文様を見ることができます。



谷部際の高まり西斜面に厚く形成された遺物包含層の成り立ちと、自然地形が縄文人の活動によって変化していく様子。今年の調査では、これらを解き明かしていきます。続報に御期待ください。